

の自己超越においても自己は全くの無に帰するわけではない³⁾。それにしても、神を知ることにして語られる自己実現において、自己認識にどのような位置づけ、意味が与えられるかは問題となろう。また、この知的本性の実現は、愛 (caritas) による神との一致に基づくものである⁴⁾以上、それは、知性認識一般のあり方を越えるものと考えられ、そこで自己認識を語るとすれば、それもまた、ある特別なあり方が予想されよう。その他問題にすべき点の指摘も含め、今後の研究のために何らかの示唆をいただければありがたい。

註

- 1) *ultima et perfecta beatitudo non potest esse nisi in uisione diuinae essentiae: S. th. I-II, q. 3, a. 8.*
- 2) *Alia autem est beatitudo naturam hominis excedens, ad quam homo sola diuina uirtute peruenire potest, secundum quandam diuinitatis participationem: S. th. I-II, q. 62, a. 1.*
- 3) この点については、拙論「人間の受動的完全性について——トマス・アクィナスの「賜物」(donum) 論に関する一考察——」、『トマス・アクィナスの倫理思想』(中世思想研究所編) 創文社、近刊、193-218 参照。
- 4) *Ultimum quidem et principale bonum hominis est Dei fruitio, secundum illud Psalm: Mihi adhaerere Deo bonum est: et ad hoc ordinatur homo per caritatem: S. th. II-II, p. 23, a. 7; caritas attingit Deum, quia coniungit nos Deo: II-II, q. 23, a. 3; per ipsam (=caritatem) mens Deo unitur: II-II, q. 24, a. 4.*

著者コメント

稲垣 良典

既刊出版物部会で『抽象と直観』を取りあげることにについて承諾を求められたとき、出版後すでに7年たっている旧著を批評していただくことにたいする面はゆさと同時に、一種の後めたさを感じた。それは、この書物の「まえがき」で、(不十分とはいえ) オッカムの認識理論に親しんだことで「未知の国」になってしまったように感じられるトマスの著作と新たな気持で取りくまなければならないと感じている、と書い

たにもかかわらず、「トマスの哲学——なかんずく認識の形而上学——の新しい発見」の仕事は一向に進んでいないことへの後めたさであった。認識の形而上学については、たんに「形而上学的な認識理論」とどまるのではなく、知性認識へのふりかえりを徹底させることを通じて「存在」の形而上学の構築をめざすべきである、と考えており、『抽象と直観』の続編としてぜひまとまった形で公けにしたいと願っている。

著者自身がトマス研究の道程における一つの「道草」と呼んでいる書物にたいして寄せられた四つの質問には、それぞれの質問者の長年にわたる専門的研究の重みがかかっていて、容易に切り返すことはできない。水田英実氏の、トマスは一貫してアヴェロエス説との対決において自らの靈魂論・認識理論を形成したのではないか、という質問にたいしては、トマスが深刻に受けとめたアヴェロエス説は主としていわゆる「二重真理説」に関わるのであり、知性単一説はアリストテレス説の強引な歪曲と見なしていたのではないか、という私自身の印象を提示したい。渋谷克美氏にたいしては、オッカムも自己の認識活動へのふり返りは行っているかもしれないが、そこから帰結する「靈魂論」は自己意識の主体としての「われ」の「靈魂論」にならざるをえないことが歴史的にも立証されるのではないか、と答えたい。清水哲郎氏の『抽象と直観』におけるオッカム理解は「オッカムの通俗的解釈ではないか」という批判にたいしては、たしかに私がオッカムの認識理論を認識の形而上学の「欠落」という否定面で捉えきった、と考えているとすれば、それを「通俗的」解釈と批判されても仕方がない、と言わざるをえない。加藤和哉氏の質問は、超時間的ないし非時間的な働き（現実態）として考察されることの多い知性的認識を、至福をめざす歩みとしての人間の行為の歴史のなかで捉えなおす必要性にかかわっており、私自身の長年の探求課題であることをのべて答えにかえたい。